

# インドおよび周辺地域のチベット・ビルマ諸語の参照文法書と諸問題

澤田英夫

## Issues in the Reference Grammars of Tibeto-Burman Languages in India and Its Neighboring Area

SAWADA, Hideo

**Keywords:** Tibeto-Burman, word classes, adjective, clitic, case-marking

**キーワード:** チベット・ビルマ諸語, 語類, 形容詞, 接語, 格標示

1. はじめに
2. 「インド圏」のTB諸語
3. 「インド圏」のTB諸語に見られる特徴的な現象
4. 文法書のジャンル
5. 記述上重要な概念・言語現象
6. おわりに

### 1. はじめに

本稿は、AA研共同利用・共同研究課題「参照文法書研究」研究会において、メンバーである林範彦神戸市外国語大学教授と分担して行ったチベット・ビルマ(TB)系言語の参照文法書についての発表のうち、筆者が担当したインドおよび周辺領域についての発表内容に大幅に修正・加筆したものである。

### 2. 「インド圏」のTB諸語

本論集の林論文では、TB諸語の分布について、「本稿では試みにチベット・ヒマラヤ地域を含む部分をチベット・ビルマ諸語の西側に、中国雲南省・四川省・貴州省やビルマ中部・東部、およびタイ・ラオス・ベトナム北部を含む地域をチベット・ビルマ諸語の東側に位置するとする。」

澤田英夫. 2022. 「インドおよび周辺領域のチベット・ビルマ諸語の参照文法書と諸問題」. 渡辺己・澤田英夫(編)『参照文法書研究』.(アジア・アフリカ言語文化研究 別冊 02.) pp. 121-147. DOI: <https://doi.org/10.15026/116963>



This work is licensed under a Creative Commons Attribution 4.0 International License.

<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/>

と述べている (p. 108)。林論文の図 1 で、破線の直線によって区切られた西側の地域、つまり中国青海省・チベット・ブータン・ネパール・カシミール・インド北部・北東部・バングラデシュ東部・ミャンマー西部などの地域で話される TB 系言語を、本稿では「インド圏」<sup>1</sup>の TB 系言語と呼ぶことにする。

言語学関連の書誌学データベース Glottolog (Hammarström, Forkel, Haspelmath and Bank, eds. 2021) でシナ・チベット語族 Sino-Tibetan に分類される言語群の下位分類のうち、「インド圏」で話されている言語を含む TB 諸語の語群としては、チベット語群 Bodic/Tibetic, ブラフマプトラ語群 Brahmaputran, クキ・チン・ナガ語群 Kuki-Chin-Naga, ヒマラヤ語群 Himalayish, タニ語群 Macro-Tani, ディマール諸語 Dhimalish, コ・ブワ諸語 Kho-Bwa, ミジ諸語 Miji, クマン・マヨル諸語 Kman-Mayor, ディガル諸語 Digarish が挙げられる。

### 3. 「インド圏」の TB 諸語に見られる特徴的な現象

林論文の §1.2 では、TB 諸語全体からみた類型論的特徴を概述している。本稿では、「インド圏」の TB 諸語により顕著にみられる 2 つの特徴的な現象、動詞の人称/数一致と、文法的に条件づけられた動詞語幹の交替について記す。

#### 3.1. 動詞の人称/数一致 Person/number agreement on verbs

TB 系言語全体でみると、動詞がその項の人称/数との一致を示すという現象を持つ言語は少数派に属すると言えるだろう。「インド圏」の TB 諸語のうちでこの現象を示す言語の属する語群としては、チベット語群、クキ・チン・ナガ語群、ヒマラヤ語群が挙げられる<sup>2</sup>。

##### 3.1.1. 主語との一致を示す言語

クキ・チン・ナガ語群に属する Mizo 語や Tedim Chin 語, Thadou 語などでは、主語との一致を示す要素が動詞に前接される。Thadou 語の例を挙げる。(表 1, (1)-(3))

表1 <Thadou> Verbal Proclitic (Haokip 2014: 156, Table 4.13)

THADOU	GLOSS
<i>ka=</i>	'first person exclusive proclitic'
<i>i=</i>	'first person inclusive proclitic'
<i>na=</i>	'second person proclitic'
<i>a=</i>	'third person proclitic'

<sup>1</sup> 「インド圏」という呼称は、James Matisoff が TB 系言語の多様性を説明するために提案した 2 つの領域のうちの一つ Indosphere を訳したものである。もう一つの領域を Matisoff は Sinosphere と名付ける。

It is convenient to refer to the Chinese and Indian spheres of cultural influence as the "Sinosphere" and the "Indosphere". (Matisoff 2003: 6)

<sup>2</sup> この他に、ブラフマプトラ語群に属する Jinghpaw 語が、かつては主語/目的語の人称/数を標示する動詞文末助詞の体系を持っていたことが、ジンポー語聖書のテキストから明らかとなっている。(参考: Kurabe 2016: Ch.10 p.396-) ちなみに、「インド圏」外の TB 系言語で動詞が人称/数一致を示す言語としては、Qiang, Gyarong, Durong, Rawang および死語である西夏語 Tangut などが挙げられる。

- (1) (*kei=ĩn*) *hǎi ká=nè=è* (3) (*ámà=ĩn*) *hǎi á=ně=è*  
 1=ERG mango **1CLT=cut=DECL** 3=ERG mango **3CLT=cut=DECL**  
 ‘I am eating a mango.’ ‘He/she is eating a mango.’  
 (#CLITic, DECLarative)  
 Thadou (Haokip 2014: 156)
- (2) (*náj=ĩn*) *hǎi ná=nè=è*  
 2=ERG mango **2CLT=cut=DECL**  
 ‘You are eating a mango.’

一方、Dhimal 語や、チベット語群チベット・キナウル系に属する Kinnauri 語・Darma 語では、主語との一致を示す要素が動詞に後接される。Dhimal 語の一致要素の例を示す。(表 2, (4)–(6))

表2 (Dhimal) Simple Agreement Paradigm (King 2014: 119, Diagram 7)

	perfective	past	imperfective	future	inceptive
1s	<i>-hoi-ga</i>	<i>-gha</i>	<i>-kha</i>	<i>-ā/aŋ-ka</i>	<i>-khoi-ka</i>
1d	<i>-hoi-niŋ</i>	<i>-nhiŋ</i>	<i>-khe-niŋ</i>	<i>-a-niŋ</i>	<i>-khoi-niŋ</i>
1p	<i>-nha-hoi</i>	<i>-nha-hi</i>	<i>-nha-khe</i>	<i>-aŋ</i>	<i>-nha-khoi</i>
2s	<i>-hoi-na</i>	<i>-nha</i>	<i>-khe-na</i>	<i>-a-na</i>	<i>-khoi-na</i>
2d	<i>-hoi-niŋ</i>	<i>-nhiŋ</i>	<i>-khe-niŋ</i>	<i>-a-niŋ</i>	<i>-khoi-niŋ</i>
2p	<i>-su-hoi-na</i>	<i>-su-nha</i>	<i>-su-khe-na</i>	<i>-su-a-na</i>	<i>-su-khoi-na</i>
3	<i>-hoi</i>	<i>-hi</i>	<i>-khe</i>	<i>-aŋ</i>	<i>-khoi</i>
3c <sup>3</sup>	<i>-su-hoi</i>	<i>-su-hi</i>	<i>-su-khe</i>	<i>-su-aŋ</i>	<i>-su-khoi</i>

- (4) *hane-khoi-ka.* (6) *cuŋ-nha-hoi.*  
 go-INC-1s (#INceptive) be.cold-1p-PERF (#PERfective)  
 I’m leaving. (King 2014: 120, ex.(298)) We are cold. (ibid.: 125, ex.(326))
- (5) *lo-hi.*  
 come-P (#Past)  
 [She] came. (ibid.: 122, ex.(311))

### 3.1.2. 主語・目的語との一致を示すもの

クキ・チン・ナガ語群に属する Daai 語の動詞の人称・数一致は、前節で見た同じ語群の言語のそれと 2 つの点で異なる。1) 主語だけでなく目的語との一致も示す。2) 一致要素が動詞に前接されず、独立語として生起する。(表 3, 4, (7)–(8))

<sup>3</sup> 3 人称には数の区別がないが、3 人称の集団・集合による動作であることを強調する形態素 *-su* がある (King 2014: 127)。

表3 (Daai) Subject Agreement Paradigm (So-Hartmann 2009: 233, Table 9.1)

		1 <sup>st</sup> Person	2 <sup>nd</sup> Person	3 <sup>rd</sup> Person
<b>Singular</b>		<i>kah</i> <sup>4</sup>	<i>nah</i>	<i>ah</i>
<b>Dual/Plural</b>	exclusive	<i>kah-nih</i>	<i>nah-nih</i>	<i>ah-nih</i>
	inclusive	<i>nih</i>		

表4 (Daai) Object Agreement Paradigm (So-Hartmann 2009: 239, Table 9.3)

		1 <sup>st</sup> Person	2 <sup>nd</sup> Person	3 <sup>rd</sup> Person
<b>Singular</b>		<i>nah</i>	<i>ni:ng</i> <sup>5</sup>	–
<b>Dual/Plural</b>		<i>jah</i>	<i>ni:ng-jah</i>	<i>jah</i>

- (7) *Na:ng je=noh va mei:=üng nah nah shi=kti*.<sup>6</sup>  
 2S hare=ERG EMPH fire=INSTR **S.AGR:2S** **O.AGR:1S** burn=NON.FUT  
 ‘You, the hare, you burned me with fire.’ (So-Hartmann 2009: 239)

- (8) *Ling=noh ah ui: jah ah vok sun akdo=a ah jah mbei*.  
 Ling=ERG POSS:3S dog CONJ:and POSS:3S pig DEM well=CF **S.AGR:3S** **O.AGR:3DU** feed.  
 (#CONjunction, Classifier)  
 ‘Ling fed his dog and his pig well.’ (So-Hartmann 2009: 240)

より複雑な一致の体系を持つことで知られるのが、Limbu 語、Hayu 語、Bantawa 語、Yakkha 語などヒマラヤ語群キランティ系に属する言語である。このグループでは、動詞の接頭辞・接尾辞によって、主語/目的語の人称/数、極性、時制/相、法などを標示する。このグループに共通する特徴は次の2つである。1) 人称/数を標示する接頭辞・接尾辞が複数個のスロットに生起する。2) 形式とそれが表す人称/数範疇の対応関係が1対1でない。

キランティ系言語の例として Yakkha 語を挙げる。Schackow (2015) によると、Yakkha 語の動詞は1つの接頭辞スロットと14の接尾辞スロットを持ち、このうち人称/数一致の要素は接頭辞スロットと9つの接尾辞スロット（スロット1, 3, 6, 13, 14以外）に現れる。図1は接尾辞スロットに現れる人称/数一致要素を示したものである。この他に語幹の初頭子音と調音位置において同化する鼻音接頭辞 *N-* (3PL) がある。

<sup>4</sup> So-Hartmann (2009) は Daai 語の例を正書法を用いて挙げている。母音表記の後の *-h* は *-ʔ* を表す (So-Hartmann 2009: 50)。

<sup>5</sup> 母音表記の後の *:* は声調の1つである High tone を表す (So-Hartmann 2009: 49)。もう1つの声調である Low tone は表記されない。

<sup>6</sup> *ü* は */w/* を表す。また *sh* は *s* の有気音を表す (So-Hartmann 2009: 50)。

図1 (Yakkha) Templatic representation of indicative person/number suffixes (Schackow 2015: 219, Figure 8.1)

2	4	5	7	8	9
- <i>nen</i> 1>2	- <i>N</i> (copy) <sup>7</sup>	- <i>ci</i> ~ - <i>cin</i> DUAL <i>i</i> ~ - <i>in</i> 1/2PL	- <i>u</i> 3.P	- <i>N</i> (copy)	- <i>ci</i> 3NSG.P
10	11	12	(15)	(16)	
- <i>m</i> 1/2PL>3	- <i>ŋ(a)</i> EXCL	- <i>ka</i> 2	(= <i>na</i> ) NMLZ.SG (= <i>ha</i> ) NMLZ.NSG/ NMLZ.NC <sup>8</sup>	(= <i>ci</i> ) NSG	

表5 (Yakkha) Indicative person/number marking (intransitive and transitive) (Schackow 2015: 218, Table 8.11)

A>P	TRANSITIVE						3SG	3NSG	INTRANSITIVE
	1SG	1NSG	2SG	2DU	2PL				
1SG			- <i>nen(=na)</i>				- <i>u-ŋ(=na)</i>	- <i>u-ŋ-ci-ŋ(=ha)</i>	- <i>ŋ(=na)</i>
1DU.EXCL			- <i>nen-cin(=ha)</i>				- <i>ŋ-c-u-ŋ(=na)</i>	- <i>ŋ-c-u-ŋ-ci-ŋ(=ha)</i>	- <i>ŋ-ci-ŋ(=ha)</i>
1PL.EXCL			- <i>nen-in(=ha)</i>				- <i>u-m-ŋa(=na)</i>	- <i>u-m-ci-m-ŋ(=ha)</i>	- <i>i-ŋ(=ha)</i>
1DU.INCL							- <i>c-u(=na)</i>	- <i>c-u-ci(=ha)</i>	- <i>ci(=ha)</i>
1PL.INCL							- <i>u-m(=ha)</i>	- <i>u-m-ci-m(=ha)</i>	- <i>i(=ha)</i>
2SG	- <i>ŋ-ka(=na)</i>						- <i>u-ka(=na)</i>	- <i>u-ci-ka(=ha)</i>	- <i>ka(=na)</i>
2DU							- <i>c-u-ka(=na)</i>	- <i>c-u-ci-ka(=ha)</i>	- <i>ci-ka(=ha)</i>
2PL		- <i>ka(=ha)</i>					- <i>u-m-ka(=na)</i>	- <i>u-m-ci-m-ka(=ha)</i>	- <i>i-ka(=ha)</i>
3SG	- <i>ŋ(=na)</i>		- <i>ka(=na)</i>				- <i>u(=na)</i>	- <i>u-ci(=ha)</i>	(= <i>na</i> )
3DU				- <i>ci-ka(=ha)</i>		- <i>i-ka(=ha)</i>	- <i>c-u(=na)</i>	- <i>c-u-ci(=ha)</i>	- <i>ci(=ha)</i>
3PL		(= <i>ha</i> )	- <i>N...-ka(=na)</i>				- <i>N...-u(=na)</i>	- <i>N...-u-ci(=ha)</i>	- <i>N... ( = ha=ci)</i>

それぞれの人称/数一致要素が特定の人称/数/文法関係を表すことはむしろ少ない。例えば、スロット 2 の *-nen* (1>2) は主語が 1 人称で目的語が 2 人称であることを表し、スロット 10 の *-m* (1/2PL>3) は主語が 1/2 人称複数で目的語が 3 人称であることを表す。また、スロット 9 の *-ci* (3NSG.P) は目的語が 3 人称非単数であることを、スロット 12 の *-ka* (2) は主語・目的語のいずれかが 2 人称であることを、スロット 7 の *-cin* ~ *-ci* (DUAL) は主語・目的語のいずれかが双数であることを表す。これらが組み合わさって主語・目的語の人称/数を標示する。表 5 は、直説法の人称/数標示のパラダイムを示したものである。

具体的な用例をもとに、人称/数解釈のしかたの一例を示す。

- (9) a. *piʔ-nen=na*.  
 give[PST]-1>2=NMLZ.SG  
 ‘I gave it to you.’
- b. *piʔ-nen-in=ha*.  
 give[PST]-1>2-PL=NMLZ.NSG<sup>9</sup>  
 ‘I gave it to you (plural).’ OR  
 ‘We (dual) gave it to you (plural).’ OR  
 ‘We (plural) gave it to you (singular/dual/plural).’ (Schackow 2015: 221)

(9b) には、主語が 1 人称で目的語が 2 人称であることを表す *-nen* と、主語か目的語のいずれかが 1/2 人称複数であることを表す *-in* が現れる。この場合、1 人称主語と 2 人称目的語のいずれもが複数である可能性があり、もう一方の数は単数/双数/複数のいずれでもあり得るため、主語・目的語の数の解釈に幅が生じる。一方、(9a) では *-nen* のみが現れる。主語・目的語のいずれかが 1/2 人称複数を表す *-in* も、またいずれかが双数であることを表す *-cin* も共起しないことから、いずれも単数である読みが選択される。

上の例は、接辞の存在と解釈との間にグロスに表しきれないような依存関係が存在することを示している。個々の接辞が担う人称/数情報の合計と、実際の人称/数パラダイムの間をつなぐためには、このような接辞の存在と解釈の間の依存関係、また接辞の生起に関する接辞相互の依存関係（例えば、スロット 9 の *-ci* (3NSG.P) とスロット 10 の *-m* (1/2PL>3) は、いずれもスロット 7 の *-u* (3.P) が生起する場合のみ生起する）が与えられる必要がある、このことがこの言語の人称/数標示体系を複雑なものにしている。

<sup>7</sup> キランティ系言語には、鼻音接尾辞あるいは鼻音を含む接尾辞が複数回生起する *affix copying* あるいは *nasal copying* と呼ばれる現象が見られる。このコピーは意味に影響を与えない (Schackow 2015: 83)。Yakha 語の場合、スロット 10 の *-m* があればそれが、なければスロット 11 の *-ŋ(a)* の鼻音が、スロット 9 に *-ci* が現れる場合スロット 8 に、スロット 5 に *-cin* ~ *-ci* が現れる場合スロット 4 に、それぞれコピーされる。Schackow はこの操作を、閉音節を作り出すための音韻的修正であろうと述べている (ibid.: 84)。

<sup>8</sup> スロット 15 には随意的要素として名詞化子が現れ得る。動詞の S または P 項が単数の場合 *=na* が、双数・複数の場合 *=ha* が、それぞれ現れるため、広い意味での一致要素とみなすことができる (Schackow 2015: 226)。なお、「名詞化子」という術語については注 22 を参照。

<sup>9</sup> 原典にグロス 1>2 が抜けていたので補った。また、グロス中の PL は図 1 の 1/2PL に当たる。

### 3.2. 文法的に条件づけられた動詞語幹の交替

TB系言語に見られる動詞語幹の交替<sup>10</sup>には、キランティ系言語などに見られる音韻的に条件づけられたものの他に、文法的に条件づけられたものも存在する。よく知られているのは、古典チベット語の時制・法による語幹交替である。DeLancey (2003) からの例を表6に挙げる。

表6 古典チベット語の他動詞の時制・法による語幹交替 (DeLancey 2003: 210-211 の記述に基づく)

英訳	現在	過去	未来	命令
finish	<i>sgrub</i>	<i>bsgrubs</i>	<i>bsgrub</i>	<i>sgrubs</i>
see	<i>lta</i>	<i>bltas</i>	<i>blta</i>	<i>ltos</i>
pursue	<i>snyegs</i>	<i>bsnyegs</i>	<i>bsnyeg</i>	<i>snyeg</i>
do	<i>byed</i>	<i>byas</i>	<i>bya</i>	<i>byos</i> (以上 p.210 より)
hit	<i>'debs</i>	<i>btab</i>	<i>gtab</i>	<i>thob</i>
make	<i>'chos</i>	<i>bzos</i>	<i>bzo</i>	<i>chos</i>
mince	<i>gtsab</i>	<i>btsabs</i>	<i>btsab</i>	<i>gtsabs</i> (以上 p.211 より)

これとは全く異なる要因によるものとして、クキ・チン・ナガ語群の Asho, Sizang, Tiddim, Falam, Mizo, Daai, Mindat Cho, Hakha Lai, Thadou, Hyaw などの言語に広くみられる (VanBik 2009: 10)、主として生起する統語的環境による語幹交替がある。

表7は、So-Hartmann (2009) が示す、Daai 語の語幹 A (他のクキ・チン諸語の語幹 II に対応) および B (同じく語幹 I に対応) がどのような環境で現れるかの選択基準である。

表7 (Daai) Verb Stem Selection Pattern (So-Hartmann 2009: 106, Table 4.5)

<b>General pattern</b>	<b>Stem</b>		<b>Alternate</b>	<b>Stem</b>	
<b>Clause Type</b>	<b>A</b>	<b>B</b>	<b>Condition</b>	<b>A</b>	<b>B</b>
indicative (intransitive)		X	causatives or applicatives	X	
indicative (transitive)	X		focus shift		X
			negative		X
interrogative		X	narrow focus (applicatives)	X	
imperative		X	(applicatives)	X	
subjunctive		X			
non-final clause chain		X	(applicatives)	X	
non-final adverbial	X		adverbials with <i>kkhai</i> or <i>lüphi</i>		X
nominalization	X		noun-verb compounding		X

<sup>10</sup> 語根交替として扱う研究もある。

表の左側が節のタイプごとにみた一般的なパターンを、右側がその一般的なパターンに従わない場合の条件を表す。例えば、平叙文では主動詞が自動詞の場合語幹 B が、他動詞の場合語幹 A がデフォルトで用いられる。しかし、焦点標識 *ta* の後続や疑問詞疑問文の答えになることによって、文中のある要素が焦点となることが明らかな場合、他動詞文でも語幹 B が用いられる (So-Hartmann 2009: 99)。また、否定の場合にも語幹 B が用いられる (ibid.: 100)。疑問文・命令文の場合には主動詞が他動詞であっても語幹 B が用いられる (ibid.: 101)。ところが、動詞が迂言的な使役構文・適用構文で用いられる場合、動詞の自他・文のタイプ・極性のいかんにかかわらず語幹 A が用いられる (ibid.: 102)。表 7 の記述だけでは判断に迷うケースもありそうだが、ともかく語幹の選択にかかわる条件が簡単に一般化できるものでないことだけは間違いない。

So-Hartmann は、2 つの語幹の音韻的關係を 4 つのグループに分類した。表 8 は各グループから例を抽出したものである。

表 8 Daai 語の動詞語幹 A/B の音韻的關係のパターン (So-Hartmann 2009: 72-75 より)

	Stem A		Stem B	Gloss	
グループ 1	<i>pee:t</i>	→	<i>pe</i>	'give'	
	<i>oo:k</i>	→	<i>o</i>	'drink'	
	<i>kyoot</i>	→	<i>kyo</i>	'rot'	
	<i>tuk</i>	→	<i>tu</i>	'stab'	(以上 p.72 より)
グループ 2	<i>hneh</i>	←	<i>hne:</i>	'touch'	
	<i>kboh</i>	←	<i>kboo:p</i>	'clap hands'	
	<i>kyah</i>	←	<i>kyap</i>	'touch'	
	<i>kbeih</i>	←	<i>kbee:</i>	'slap'	(以上 p.73 より)
	<i>phyoh</i>	←	<i>phyou:</i>	'weed field'	
グループ 3	<i>kphyan</i>	←	<i>kphya:ng</i>	'spread out'	(以上 p.74 より)
グループ 4	<i>hnim</i>	←	<i>hni:m</i>	'kill'	
	<i>kheei</i>	←	<i>khee:</i>	'hatch'	(以上 p.75 より)

グループ 1 は、語幹 A を基本形とし、1) 末子音を削除 2) 母音を短母音に 3) 声調を低声調に、という操作を加えて語幹 B を派生するパターンである。

グループ 2 は、語幹 B を基本形とし、1) 末子音を /-ɔ/ に変更するか、 /-ɔ/ を付加 2) 母音を短母音に 3) 声調を低声調に、という操作を加えて語幹 A を派生するパターンである。

グループ 3 は、語幹 B を基本形とし、1) 末子音 /-ŋ/ を /-n/ に 2) 高声調を低声調に、という操作を加えて語幹 A を派生するパターンである。

グループ 4 は、語幹 A : 語幹 B が低声調 : 高声調で対立するパターンで、どちらを基本形とすることもできるが、So-Hartman は語幹 A がグループ 2 や 3 と同じ低声調のみを持つことを根拠に、語幹 B を基本形とした (So-Hartmann 2009: 95)。

共時的にみて派生の向きが一方向でないと分析されることから、2 語幹体系の成立の背後に複雑な歴史があるものと推測される。

## 4. 文法書のジャンル

本節では、「インド圏」のTB系言語の文法書の成立経緯からみたジャンルのうちで顕著なもの2つ、学位論文と政府関連刊行物について概述する。言語体系の全体を示したものを広く「文法書」として取り上げているため、参照文法書という本論集のテーマからははみ出す部分も少なからずあるが、ご容赦いただきたい。

### 4.1. 学位論文

南アジアの大学でTB系言語の記述文法を扱った博士論文の数について見ると、1960-80年代には Deccan College (インド, Maharashtra 州 Pune) の独壇場の感がある。2000年代に入ると、Manipur 大学 (インド, Manipur 州), North-Eastern Hill 大学 (インド, Meghalaya 州), Tribhuvan 大学 (ネパール, Kathmandu) など、「インド圏」のTB系言語の使用地域にある大学の博士論文の数が増加し、特に Manipur 大学の躍進が目覚ましい。TB系言語の使用地域の外ではあるが Jawaharlal Nehru 大学 (インド, Delhi) にも4本の博士論文が提出されている。

南アジアの外では、Leiden 大学 (オランダ), Oregon 大学 (アメリカ), LaTrobe 大学 (オーストラリア), Bern 大学 (スイス) などの大学でTB系記述文法を扱った博士論文が多い。

近年、各国の大学で博士論文のインターネット公開が進んできた。インドでは2016年、教育省大学助成委員会が大学の研究者に論文や学位論文の電子版の提出を義務付け、それを公開するリポジトリを構築するという法規を告示し、大学助成委員会下の autonomous inter-university centre である Information and Library Network (INFLIBNET) Centre によって学位論文公開リポジトリ Shodhganga が構築された。これによって博士論文へのアクセスが格段に容易になった。

### 4.2. 政府関連の機関から刊行されたもの

#### 4.2.1. インド諸語中央研究所が刊行した文法書

インド諸語中央研究所 Central Institute of Indian Languages (CIIL) は、インドの人的資源開発省 Ministry of Human Resource Development 言語局 Language Bureau の一部として1969年に設立された。そのスタンスは、下記の設置目的・目標によく現れている。

CIIL: Aims and Objectives

- Advices and Assists Central as well as State Governments in the matters of language.
- Contributes to the development of all Indian Languages by creating content and corpus.
- Protects and Documents Minor, Minority and Tribal Languages.
- Promotes Linguistic harmony by teaching 15 Indian languages to non-native learners.

<http://www.ciil.org/aboutAims.aspx> より。

中央および州政府の言語政策についての助言と支援、コンテンツ・コーパス作成によりインド諸言語の発展に対して貢献すること、主要言語の教育の促進と並んで、少数民族言語の保護と記録が挙げられている。

この目標に向けて、これまでに25冊、うちTB系言語については15冊の文法書を刊行している。(Ao, Kokborok, Purik, Sema, Angami, Lotha, Mishmi, Apatani, Karbi, Tangkhul Naga, Mising, Mao Naga, Hmar, Khezha, Konyak. このうち、最初の11冊にはCIIL Grammar Series というシリーズ名が

与えられている。) TB 系言語に関してはこの他、11 冊の *Phonetic Reader*, 8 冊の辞書がある。その他、民話集・子守歌集や研究書も出版している。

CIIL Grammar Series の立ち上げ(シリーズ 1 冊目の *Ao Grammar* は 1975 年に刊行された)に当たって書かれたと思われる、当時の所長 E. Annamalai の序文 *Preface* には、地域の多数派と少数民族の間の双方向コミュニケーションを増やす必要があり、そのために少数民族の言語を学ぶ多数派の人々の助けとするべく、この文法書シリーズを読本・辞書・教授マニュアルを含めたパッケージの一部として企画されたことが記されている。(Sastri 1984: vii, 同シリーズの他の文法書をいくつか見た限り、基本的に同じ序文が掲載されているようである。)

同じく序文に記された以下の内容は、このシリーズの性格をよく表している。

- ・ 文法書の構成は、文法的形式より文法的機能に重きを置く。これは学習者がすでに知っていて表現したい文法的機能が学習言語でどのような形式で表されるかを容易に見つけられるようにするためである。(名詞の文法性や、動詞の時制など、当該言語にあるとは限らない範疇を項目として立てているのはこの一例であろう。)
- ・ 主に教学を目的とするため、理論的な議論や正当化は最小限に留める。
- ・ 文法書は名詞形態論と動詞形態論のカテゴリーに大きく分けられる。形容詞の記述は名詞形態論の後、副詞の記述は動詞形態論の後に続く。
- ・ 統語論の章では、表層レベルでの構成素順序を記述する。(当時のインドにおける生成文法に対する意識が透けて見える文言である。)
- ・ 文法のデータは、フィールドで主に 1 人のインフォーマントから、語彙・文リストを用いたエリシテーションによって得たもの。

ここに挙げた文法書の構成は、インドの大学の大学院生が執筆した博士論文のいくつかにも踏襲されており、その影響力は未だ大きいものがあると思われる。

#### 4.2.2. Arunachal Pradesh 州政府関連の言語便覧

インドの Arunachal Pradesh 州は、1951 年から 1972 年まで東北辺境地区 North East Frontier Agency (NEFA) と呼ばれ、連邦領であった時期を経て 1987 年に現行の名称となった。この地域の少数民族言語の概要を記した言語便覧が NEFA の調査局 Research Department から 1963–1972 年の間に 4 冊 (Gallong, Dafla, Nocte, Galo), Arunachal Pradesh 州政府の調査局 Directorate of Research から 1976–2004 年の間に 16 冊 (Hill Miri, Miji, Tagin, Sherdukpen, Jugli, Lungchang, Bugun, Bokar, Tutsa, Nah, Pailibo, Nishing, Mungshang, Aashing, Ramo, Tangam) 刊行されていることが確認できる<sup>11</sup>。Badu (1994) *Pailibo Language Guide* には Arunachal Language Series 31 の名称が見られるが、他の書籍には見られず、シリーズの全容は謎である。

### 5. 記述上重要な概念・言語現象

本節では、TB 系言語の包括的な記述文法を扱った博士論文で、インターネット上でファイルが公開されているもののうち下記の 19 本を取り上げ、そこで言語記述上重要な概念や注目され

<sup>11</sup> この他にも、同州の情報・公共関係局長 The Director of Information and Public Relations を発行者として Sulung 語の便覧が刊行されている。

る言語現象がどのように扱われているかを比較検討する。

1. **Kurtöp [Hyslop]**\*<sup>12</sup> Hyslop, Gwendolyn. 2011. "A Grammar of Kurtöp." (チベット語群ツァンラ・チベット系)
2. **Bunan [Widmer]**\* Widmer, Manuel. 2014. "A Descriptive Grammar of Bunan." (チベット語群チベット・キナウル系)
3. **Darma [Willis]**\* Willis, Christina M. 2007. "A Descriptive Grammar of Darma: An Endangered Tibeto-Burman Language." (チベット語群チベット・キナウル系)
4. **Jinghpaw [Kurabe]** Kurabe, Keita. 2016. "A Grammar of Jinghpaw, from Northern Burma." (ブラフマプトラ語群ジンポー・ルイ系)
5. **Kadu [Sangdong]** Sangdong, David. 2012. "A Grammar of the Kadu (Asak) Language." (ブラフマプトラ語群ジンポー・ルイ系)
6. **Atong [van Breugel]**\* van Breugel, Seino. 2008. "A Grammar of Atong." (ブラフマプトラ語群ボド・ガロ系)
7. **Moyon [K. H. Devi]** Devi, Kongkham Hemabati. 1989. "A Descriptive Study of the Moyon Language." (クキ・チン・ナガ語群古クキ系)
8. **Daai [Hartmann]** So-Hartmann, Helga. 2009. *A Descriptive Grammar of Daai Chin*.<sup>13</sup> (クキ・チン・ナガ語群周辺クキ・チン系)
9. **Thadou [Haokip]** Haokip, Marykim. 2014. "Grammar of Thadou-Kuki: A Descriptive Study." (クキ・チン・ナガ語群周辺クキ・チン系)
10. **Zou [L. H. Singh]** Singh, Lukram Himmat. 2013. "A Descriptive Grammar of Zou." (クキ・チン・ナガ語群周辺クキ・チン系)
11. **Khezha [Kapfo]** Kapfo, Kedusto. 1992. "Khezha: A Descriptive Analysis." (クキ・チン・ナガ語群アンガミ・アオ系)
12. **Inpui [W. P. Devi]** Devi, Waikhom Pinky. 2014. "A Descriptive Grammar of Inpui." (クキ・チン・ナガ語群ゼメ系)
13. **Karbi [Konnerth]** Konnerth, Linda. 2014. "A Grammar of Karbi." (クキ・チン・ナガ語群カルビ系)
14. **Dhimal [King]**\* King, John Timothy. 2008. "A Grammar of Dhimal." (ディマール語群)
15. **Bantawa [Doornenbal]** Doornenbal, Marius Albert. 2009. "A Grammar of Bantawa: Grammar, Paradigm Tables, Glossary and Texts of a Rai Language of Eastern Nepal." (ヒマラヤ語群キランティ系)
16. **Hayu [Michailovsky]**\* Michailovsky, Boyd. 1981. "Grammaire de la langue hayu (Nepal)." (ヒマラヤ語群キランティ系)
17. **Yakkha [Schackow]** Schackow, Diana. *A Grammar of Yakkha*.<sup>14</sup> (ヒマラヤ語群キランティ系)

<sup>12</sup> \*を付した博士論文は、後に書籍として出版されている。詳細は、本論集所収の澤田英夫・林範彦(編)「チベット・ビルマ諸語の参照文法書目録 [抜粋版]」(pp. 149-181)を参照。

<sup>13</sup> 2008年にLondon大学SOASに提出された博士論文であり、後にSTEDT Monograph Series 7として出版およびインターネット公開された。今回参照したのは後者である。

<sup>14</sup> 2014年にチューリヒ大学に提出された博士論文であり、後にLanguage Science PressのStudies in Diversity Linguisticsシリーズの1巻として出版およびインターネット公開された。今回参照したのは後者である。

18. **Lepcha [Plaisier]\*** Plaisier, Heleen. 2006. “A Grammar of Lepcha.” (ヒマラヤ語群<sup>15</sup>)

19. **Galo [Post]** Post, Mark W. 2007. “A Grammar of Galo.” (タニ語群)

## 5.1. 語類/品詞

最初に、形態論・統語論の両方で重要な概念である語類 word class あるいは品詞 part of speech にかかわるいくつかの点について検討する。

### 5.1.1. 語類の提示のしかた

まず、語類そのものが文法書の中でどのように提示されているかを観察する。

その言語の語類にどのようなものがあるかを示す最も参照性の高い方法は、当然ながら、語類を概観する、word classes や parts of speech といった見出しを持つ章・節を設けることである。今回選択した文法書 19 本のうち、語類について概観する章・節を設けているものは 12 本あった。

Kurtöp [Hyslop], Jinghpaw [Kurabel], Kadu [Sangdong], Atong [van Breugel], Daai [Hartmann], Zou [L. H. Singh], Karbi [Konnerth], Bantawa [Doornenbal], Hayu [Michailovsky], Yakkha [Schackow], Lepcha [Plaisier], Galo [Post]

これらの文法書では、自立的に用いられ、句の中核的要素となる形式（しばしば「語彙的形式」と呼ばれる）だけでなく、句の中核的要素に付随する形式（「文法的形式」と呼ばれることがある）をも語類分類の対象とする。後者の付属的・付随的形式の取り扱いには文法書によって差異が見られ、形態論的自立性のステータスに沿って大まかに分類するものから、より詳細な機能的分類を行うものまである<sup>16</sup>。一次的分類として極めて多くの語類を区別している例として、Atong [van Breugel] の例を表 9 に挙げる。

<sup>15</sup> Glottolog によると、Lepcha 語はヒマラヤ語群の中では系統の近い言語と下位グループを作らない孤立した言語である。

<sup>16</sup> Galo [Post] では、語の派生や屈折にかかわる接辞も含めて機能的類 functional classes として扱い、noun, adjective, verb などの語彙的類 lexical classes と区別する (Post 2007: 54–55)。

表9 〈Atong〉 List of word classes (van Breugel 2008: 83, Table 19)

<b>OPEN WORD CLASSES</b>	<b>CAN FUNCTION AS PREDICATE HEAD?</b>
Verbs	<b>YES</b>
Nouns	<b>YES</b>
Adverbs	no
<b>CLOSED WORD CLASSES</b>	
Type 1 adjectives	<b>YES</b>
Type 2 adjectives	<b>YES</b>
Time words	no
Postpositions	no
Demonstratives	<b>YES</b>
Deictic-only demonstratives	no
Interrogatives	some
Indefinite proforms	no
Discourse connectives	no
Numerals	no
Classifiers	no
The additive conjunction	no
Personal pronouns	<b>YES</b>
The generic pronoun	no
Proclauses	no
Onomatopoeia	no
Interjections	no
The prohibitive word	no

語類を概観する章・節を持たない文法書の中にも、語の集合を表す「名詞」「動詞」などの名称を見出しとする章・節で、その名称が語のクラスを表すという言明を含むものがある。

Bunan [Widmer] の 4-14 章の章立ては、以下のようになっている。

- Ch.4 **Nouns** and nominal morphology
- Ch.5 **Pronouns** and **demonstratives**
- Ch.6 **Adjectives**
- Ch.7 **Quantifiers**
- Ch.8 **Adverbs**
- (Ch.9 The structure of the noun phrase)
- Ch.10 Discourse clitics and discourse particles
  - (10.1 Introduction)
  - 10.2 **Discourse clitics**
  - 10.3 **Discourse particles**
- Ch.11 Interjections and Conventionalized communicative expressions
  - (11.1 Introduction)

- 11.2 **Interjections**
- (11.3 Authoritative use of kinship terms)
- 11.4 **Conventionalized communicative expressions**
- Ch.12 **Verbs**
- (Ch.13 Epistemic marking and syntactic agreement)
- Ch.14 **Copulas**

太字にした名称については、当該の章・節にそれらの名称の表すものが lexical class(es) (Widmer 2014: 174, 267, 313, 315, 370, 399, 794), a distinct word class (ibid.: 330) あるいは class(es) of lexemes (ibid.: 396, 577) の名称であるという言明が含まれている。ゆえにこれらの章・節がそれぞれ個別の語類について述べたものであるとみなして差し支えないであろう。ただし、複数の章・節の記述を読み通さない限りこの言語の語類を把握できないわけだから、語類を概観する章・節を持つ文法書よりも参照性の点で一步劣る点は否めない。

以下の文法書については、一部の名称に対してしか上記の言明が見られず、カッコ内の内容についても、特定の範疇を表すものとして用いられるかどうか定かでないものが含まれる。

- Darma [Willis] (“word class”)
- Moyon [K. H. Devi] (“class of word”)
- Thadou [Haokip] (“class of word, word class, class of substantives, form classes”)
- Khezha [Kapfo] (“category of word”)
- Inpui [W. P. Devi] (“grammatical category”)

このような語類の非明示的な取り扱い、これらの文法書が暗黙のうちに既存の文法観や枠組を前提としていることを意味するように思われる<sup>17</sup>。

### 5.1.2. 名詞代用表現：語類か、下位類か

人称・指示・疑問・不定などの名詞代用表現は、一つのクラスにまとめられる場合も、複数のクラスに分けられる場合もあるが、ここでは便宜的に一括して扱うことにする。

今回対象とする文法書の名詞代用表現の取り扱いは、以下のように分類できる。

#### A. 名詞 noun/ (仏) nom<sup>18</sup>と異なる独立した語類 (代名詞 pronoun/ (仏) pronom) として扱うもの。

- Bunan [Widmer], Kadu [Sangdong], Atong [van Breugel], Daai [Hartmann], Zou [L. H. Singh], Yakkha [Schackow], Lepcha [Plaisier] (Darma [Willis], Moyon [K. H. Devi], Thadou [Haokip], Khezha [Kapfo], Inpui [W. P. Devi], Dhimal [King])

( ) 内に入れたのは、前節で語類を明示的に宣言していないものとみなした文法書である。いずれも代名詞というクラスを設定してはいるが、前述した理由によりこれらが語類であると断定す

<sup>17</sup> Dhimal [King] についてもこのことが当てはまると言えるだろう。この文法書の Nominal Morphology の章 (p.49-) に nouns, adjectives, numerals, classifiers, pronouns の名称を含むタイトルを持つ節が、Verbal Morphology の章 (p.101-) に copulas および manner adverb の名称を含むタイトルを持つ節が、それぞれ現れてはいるが、これらが類や範疇の名称であるといった記載が一切ない。そもそも nominal morphology, verbal morphology にも定義を与えていない。

<sup>18</sup> 本稿で取り上げる文法書のうち、Hayu [Michailovsky] だけがフランス語で書かれている。

ることはできない。

人称・数・性・話し手―聞き手からの近さなど比較的少数の素性による範列的な系をなす、その範列的な系を反映した固有の形態的特徴を持つ、などを独立した語類として扱う根拠としていると思われる。

以下の文法書では、代名詞と名詞をそれぞれ独立した語類として立てつつ、いずれも動詞の項となれるという共通性を示すために、両語類を包摂する名詞的 *nominal* という上位類を設定している。

Bantawa [Doornenbal], Hayu [Michailovsky]

## B. 名詞の下位類とするもの

Jinghpaw [Kurabe]

動詞の項となれるという統語特徴を根拠に、人称代名詞 *personal pronouns*, 指示詞 *demonstratives*, 疑問-不定詞 *interrogative-indefinites* をいずれも名詞の下位類とする (Kurabe 2016: 153)。

## C. 代用表現 *pro-forms* の下位類とするもの

Kurtöp [Hyslop], Karbi [Konnerth], Galo [Post]

これらの文法書では、各種の名詞的・副詞的代用表現をまとめて *pro-forms* というラベルを付けている。ただし、いずれの文法書でも *pro-forms* は語類であるとは明記されておらず、(*personal pronoun* や *demonstrative* が独立した語類をなすという言明も、他の語類の下位類をなすという言明もないため、これらが語類として扱われているかどうかについては断定できない。

統語的特徴を重視するならば、名詞の代用表現は名詞の下位類とするのが妥当だと筆者は考えるが、今回検討したほとんどの文法書でそうっていない。範列的な系をなすことと、それを反映した固有の形態的特徴をより重視しているふしがある。あるいは、文法書の著者の母語あるいは教育を受けた言語の影響があるかもしれない。

### 5.1.3. 名詞の属性を表す修飾要素

次に、名詞の属性を表す名詞修飾要素として機能する語がどのように範疇化されているかについて観察する。

このような機能を持つ語の類に対して与えられることの多いラベルは形容詞 *adjective/ (仏) adjectif* であり、今回取り上げた文法書の多くにこのラベルが見られるが、実際に語類のラベルとして用いられているかどうかは文法書ごとに異なる。

## A. 属性を表すという意味的特徴と、特定の構造的・分布的特徴を持つ語の類として、「形容詞」という語類を立てているもの

Galo [Post]<sup>19</sup>

<sup>19</sup> Post が構造的・分布的特徴として挙げているものは次の4つ。1) 語根の複合あるいは接辞付加された語根を持つ 2) ADJP または PRED の主要部となる 3) 名詞化された形 (関係節) が名詞修飾に用いられる 4) 節末の陳述要素の主要部と

**B. 属性を表す名詞修飾要素として機能する語類「形容詞」を立てているもの** 前節同様、§5.1.1で語類を明示的に宣言していないとみなした文法書を()内に入れて示す。

Kurtöp [Hyslop], Bunan [Widmer], Zou [L. H. Singh], Bantawa [Doornenbal], Hayu [Michailovsky], Yakkha [Schackow], Lepcha [Plaisier] (Darma [Willis], Moyon [K. H. Devi], Khezha [Kapfo], Inpui [W. P. Devi], Dhimal [King])

**C. 属性を表す名詞修飾要素として機能する語類「形容詞」を立てている一方で、それが動詞の下位類であるという記述も行っているもの**

Atong [van Breugel]<sup>20</sup>, Daai [Hartmann] (Thadou [Haokip])

**D. 属性を表す名詞修飾要素として機能する語の類を、動詞の下位類とするもの**

Jinghpaw [Kurabe], Karbi [Konnerth]

**E. 属性を表す名詞修飾要素を、独立した語ではなく複合名詞の構成要素とみなすもの**

Kadu [Sangdong]<sup>21</sup>

各文法書がこのような語の類をどのように扱っているかが、対象言語の当該類の特徴に大きく依存することは言うまでもない。ゆえに、各言語の当該類が持つ特徴を抽出してみよう。

各言語の当該類に属する語が示す特徴として、次の3つの素性を立てる。

**[±D] (Derived)** 当該類に属する語が、動詞に名詞化子 *nominalizer*<sup>22</sup>あるいは限定修飾標識 *attributive marker* を付加したものであれば [+P], そうでなければ [-P]。

[+D] と [-D] の2つの当該類を持つ Atong の例を以下に挙げる。

- (10) a. [+D] : *təy gaʔ=gaba* (water **good=ATTR**) (van Breugel 2008: 105, ex.(67) より) 「良い水」  
(#ATTRibutive)  
b. [-D] : *nok picam* (house **old**) (ibid.: 108, ex.(69) より) 「古い家」

**[±P] (distinct Predication structure)** 当該類に属する語が述語として用いられる際に通常の動詞と同じ形式を取れば [-P], 通常の動詞と異なる形式を取れば [+P]。以下 Atong の例。

- (11) a. 主節の述語が通常の自動詞  
[*nok* [*aŋ*] {*muʔ*}=*gaba*] {*gurum* -*ok*}  
house 1s stay=ATTR collapse -cos (#Change Of State)

なれる (Post 2007: 204, Table 5.1)。このうち 1) は名詞と共通する特徴であり、3), 4) は動詞と共通する特徴である。

<sup>20</sup> 後述するように、性質の異なる Type 1 adjective と Type 2 adjective の2類を立てており、そのうちの Type 1 が自動詞の下位類であると述べている (van Breugel 2008: 83, 85, 88)。

<sup>21</sup> Sangdong によれば、動態動詞が名詞を修飾する際には名詞化子 *=panáq* による名詞化を必要とし、状態動詞はそのままの形で被修飾名詞に直接後続する。Sangdong は後者を N+V の複合名詞であると分析する (Sangdong 2012: 192–193)。仮に、状態動詞が被修飾名詞から独立した語だとすると、後述する素性は [-D, -P, +A] となる。

<sup>22</sup> 数学・論理学で operator を「演算子」と和訳するのにならってこのように訳した。

‘The house in which I lived has collapsed.’ (van Breugel 2008: 553, ex. (833)<sup>23</sup>)

b. 主節の述語が [+D] の属性語

[ue gawi] {səl-a}

DST girl beautiful-DCL (#DiStal, DeCLalative)

‘That girl is beautiful.’ (van Breugel 2008: 105 ex. (66))

# a. と同様 TAM 要素が付加されるので [-P]

c. 主節の述語が [-D] の属性語

[ie nok] {hapsan}

PRX house same (#PRefX)

‘This house is the same.’ (van Breugel 2008: 111 ex. (83))

# a. と異なり TAM 要素が付加されないの [+P]

**[±A] (distinct Attribution form)** 当該類に属する語が名詞を修飾する際に、名詞修飾節の述語動詞と同じ形式を取れば [-A]、異なる形式を取れば [+A]。以下 Atong の例。

- (12) a. [+D] の属性語：(10a) の名詞修飾語は、(11a) の関係節の述語と同じ接語 =gaba を取っているの、[-A]。  
 b. [-D] の属性語：(10b) の名詞修飾語は、(11a) の関係節の述語と異なり接語 =gaba を取らないので、[+A]。

上記3つの素性に従って、4. に属する Kadu 以外の各言語に見られる当該類を位置づけたものが表 12 である。

表12 名詞の属性を表す名詞修飾要素の素性分析

	-P			+P		
	-A (1)	?A <sup>24</sup> (2)	+A (3)	-A (4)	?A (5)	+A (6)
+D	Karbi, Galo Atong <sup>f</sup> , Daai <sup>%</sup> ,	(Moyon, Khezha <sup>25</sup> )	Zou <sup>26</sup> , (Inpui)	Yakkha <sup>%</sup> , (Darma <sup>%</sup> , Dhimal)	Lepcha	Bunan <sup>%</sup>
-D	(Thadou)		Daai <sup>#</sup> , Jinghpaw <sup>*</sup>			Yakkha <sup>#</sup> , Bunan <sup>#</sup> , (Darma <sup>#</sup> ,) Atong <sup>ff</sup> , Kurtöp, Bantawa, Hayu

<sup>23</sup> Atong [van Breugel] では各用例の1行目に形態素分析しない表示が挙げられているが、本稿の引用では省略した。また、句境界 [] と述部境界 {} 以外の構造表示も省略した。以下の例文についても同じ。

<sup>24</sup> [±A] の値が未決定である言語があるのは、それを扱う文法書に通常の動詞を述語とする名詞修飾節の記述が見当たらなかったためである。

<sup>25</sup> Khezha [Kapfo] では、修飾語が1音節の場合は前接辞 ke- を伴うが、2音節以上では前接辞を伴わない。音節数による現象なので、[-D] の別類を立てない。

<sup>26</sup> Zou [L. H. Singh] では、名詞修飾構造に、修飾語が抽象的意味を表す動詞前接辞 a- (L. H. Singh 2013: 112) を伴う形式 (ex. mi əvom (man black) ‘black man’) と、伴わない形式 (ex. mi-vom (man-black) ‘black man’) の両方の例が挙げられている

Daai [Hartmann], Yakkha [Schackow], Darma [Willis], Bunan [Widmer] の 4 言語については, % を付した類と # を付した類が並立しており, 各文法書はいずれも前者 ([+D]) をより優勢とみなしている。後者 ([-D]) は概して要素数が少なく (Widmer 2014: 325, Schackow 2015: 161), 言語によっては頻度が少なかったり (Willis 2007: 297), 他の語類に属する形式からの転用によるものを含んでいたり (Widmer 2014: 326) する。\* を付した Jinghpaw の当該類 ([-D]) は [+D] のカウンターパートを持たないが, 前述した # を付した類と同様のことが当てはまる<sup>27</sup>。

述語および名詞修飾要素としての振る舞いの観点から見ると, 素性 [+A], [+P] のいずれかを持つ表 12 の (3)-(6) 列に位置づけられた類は, 一般の動詞と異なる文法的特徴を持っていると言える。この場合, その類を動詞とは独立した語類 (形容詞) とみなす根拠がある。逆に素性 [-A], [-P] の両方を持つ表 12 の (1) 列に位置づけられた類は, 動詞類の下位類とするのが妥当であろう<sup>28</sup>。

属性語の帰属に関して, ここで行った素性に基づく判定と, 実際に文法書が行った決定の間にずれがあるものがいくつかある。それについて補足する。

**Galo [Post]** ここでは動詞の下位類とするのが妥当であると判定したが, Post は形容詞という独立した語類を立てている。

これは彼が語類の決定に音節数や意味など様々な要因を考慮に入れているためであろうと推察する。

**Thadou [Haokip]** ここでは動詞の下位類とするのが妥当と判定したが, Haokip は形容詞としてしている。ただし, 形容詞類が文法的に動詞類に類似すると述べている (Haokip 2014: 116)。

**Atong [van Breugel]** [+D], [-D] の 2 類を持つ。前者は動詞の下位類とするのが妥当, 後者は独立した語類とみなす根拠あり, というのがここでの判定だが, van Breugel は前者も Type 1 adjective としている。ただしこれが動詞の下位類という記述も行っている。

**Daai [Hartmann]** Atong 同様 [+D], [-D] の 2 類を持つ。うち後者は明らかに少数派<sup>29</sup>である。ここでの判定もおおむね Atong の場合と同じだが, So-Hartmann は両者を含む形容詞という語類を立てつつ, それが動詞の下位類であるという記述もしている。

少数ながら [-D] の形式が存在することで, 動詞の下位類と断定してしまうことを避けたのかもしれない。

**Jinghpaw [Kurabe]** ここでの判定は独立した語類とする根拠があるというものであったが Kurabe は動詞の下位類として扱っている。

ジンポー語のこの類が少数のメンバーからなることに加え, 一般の動詞同様の構造を取って節の述語となれること ([-P]) を根拠にしているのであろう。

(ibid.: 144)。後者は複合語のように見えるが, Zou [L. H. Singh] のスペーシングとハイフネーションが一貫していないため, 正確なところはわからない。

<sup>27</sup> Jinghpaw [Kurabe] は動詞を扱う章で, “Jinghpaw has a small set of adjectives, which, on the basis of its negatability, can be shown to be a subclass of verbs ...” (Kurabe 2016: 225) と述べている。

<sup>28</sup> [-P] でかつ [±A] の値が未決定である列 (2) の言語については判断を保留せざるを得ない。

<sup>29</sup> 色彩の形容詞 (So-Hartmann 2009: 113) と, 2, 3 の例外的な形容詞 (ibid.: 112, fn.1)。

5.2. 自立度からみた形態素の下位分類

5.2.1. 拘束形態素の区分

本稿で取り上げる文法書の対象言語は、いずれも意味的実質を持った言語形式に付加される拘束形態素を持つ。この節で検討するのは、本稿で取り上げる文法書が、そうした拘束形態素に下位類を認めているかどうかという点である。

今回取り上げた文法書の半数以上が、拘束形態素に接辞 affix と接語 clitic の 2 類を認めている。このうち、本文中の特定の個所で接語と接辞の相違点を明示しているのは、下記の 6 つである。

Kurtöp [Hyslop], Bunan [Widmer], Atong [van Breugel], Karbi [Konnerth], Yakkha [Schackow], Galo [Post]

これらの文法書で接語を接辞から分かつ特徴として言及されるのは、句レベルで付加される要素であること（接辞は語レベルで付加される）(Kurtöp [Hyslop], Atong [van Breugel], Karbi [Konnerth])<sup>30</sup>、ホストとなる形式の文法的範疇が比較的自由であること（接辞のホストはいずれかの範疇に特定されている）(Atong [van Breugel], Yakkha [Schackow], Galo [Post])、およびそれ自体が文法語であること（接辞は文法語をなさない）(Atong [van Breugel], Galo [Post])である。

上記の諸特徴はいずれも形態統語的なものであり、音韻的なものは含まれていない。本稿で取り上げる文法書のうちで、接語と接辞の間に音韻論的観点から見た違いがあることを示しているのは Yakkha [Schackow] のみであった。Schackow は、形態音韻規則の中に、規則が適用される音韻的領域が接尾辞は含むが後接語は含まないもの、接尾辞と後接語の両方を含むもの、両方を含むもの 3 種類があると述べている。

表13 (Yakkha) Summary of phonological domains (Schackow: 62)

	prefix	stem(s)	suffixes	clitics
(1)		stress assignment		
(2-a)	voicing/N_			
(2-b)		voicing/V_V		
(3)	vowel harmony			

表 13 (1) の強勢付与 stress assignment 規則<sup>31</sup>は語幹＋接尾辞の領域に適用され、後接語（と接頭辞）の存在は規則の適用に影響を与えない。一方、(2-b) の母音間有声化 voicing/V\_V 規則は語幹＋接尾辞＋後接語の領域に適用される。接語と接辞の間に差異を示す音韻的現象がこの地域の TB 系言語に広く見られるわけではなく、Yakkha 語がこの点で特別な部類に属するのかもしれない<sup>32</sup>。

Bunan [Widmer] は接語の特徴づけについて述べる節 (§4.4) で Aikhenvald (2002) の接語の定義に

<sup>30</sup> 表現は異なるが、Galo [Post] が接語の特徴として句を作用域とすることを挙げているのも、これに近い。

<sup>31</sup> デフォルトでは第 1 音節に主強勢が置かれるが、語の非最終音節に閉音節がある場合、そのうち最後のものに主強勢が移る (Schackow 2015: 57)。

<sup>32</sup> 後述する Hayu [Michailovsky] でも、動詞接尾辞と動詞後接語の間に、境界の前後に立つ子音素の音声の実現に関して違いが見られることを述べている。Yakkha 語も Hayu 語もヒマラヤ語群キランティ系の言語であることは興味深い。

従う旨言明しているが、全ての接語を統一的特徴のセットに基づいて定義することはできず、むしろ各形式の接語としての認定は異なる特徴に基づき、接辞寄りのものもあれば独立語寄りのものもあると述べている (Widmer 2014: 191)。また、接語と認定した形式ごとにいずれのパラメータが認定の根拠であるかを示している。

下記の文法書については少々説明を要する。

#### Hayu [Michailovsky]

語類 *parties du discours* のうち文法的類 *grammaticaux* を動詞接尾辞 *suffix verbal*、非動詞接尾辞 *suffix non-verbal*、後置詞 *postposition*、助詞 *particule* の4下位類に分けており、Michailovsky 自身がこれら下位類を相対順序 (接尾辞 - 後置詞 - 助詞) と機能によって区分したものであると述べているが、一方で、動詞要素と共起する接尾辞・後置詞・助詞の間に音韻的な違いが見られることも示している<sup>33</sup>。しかし、非動詞要素と共起する接尾辞・後置詞・助詞の間には、同様の違いは見られない<sup>34</sup>(Michailovsky 1981: 174)。

下記の文法書は接語と接辞を区別してはいるが、接語の特徴づけに関するまとまった記載を持たず、個々の接語について記述した部分で、当該形式が接語と認定される根拠を示すにとどまっている。

#### Jinghpaw [Kurabe], Daai [Hartmann], Thadou [Haokip], Dhimal [King], Bantawa [Doornenbal]

下記の文法書は接語を接辞から区別しているものの、接語一般についても、特定の接語についても、接語と認定される根拠を示していない。

#### Kadu [Sangdong]

いくつかの言語が、強勢を持つ独立語としても強勢を持たない拘束形態素としても生起する形式を持つことは記しておくべきであろう。Bunan [Widmer] の基数詞 (Widmer 2014: 344-346, §7.3.1.2)・コピュラ (ibid.: 597, ex.(779); 599, ex.(786)), Yakkha [Schackow] の指示詞 (Schackow 2015: 94)・感嘆の助詞 (ibid.: 521) などは、それぞれの文法書で独立語としても接語としても生起する要素と分析される。

下位類を認めていない場合、拘束形態素は接辞のみということになる。本稿で取り上げる文法書のうち拘束形態素として接辞のみを認めるのは、下記のものである。

#### Darma [Willis], Moyon [K. H. Devi], Zou [L. H. Singh], Khezha [Kapfo], Inpui [W. P. Devi], Lepcha [Plaisier]

このうち Darma [Willis] は数詞の短縮形や複数標識が接語である可能性について言及してはいるが、接語という類を明確に立ててはいない。

<sup>33</sup> 語根-接尾辞の境界と、語と語の境界とで、その前後に立つ子音素の音声的実現のしかたが異なる。語-後置詞は一まとまりの抑揚曲線を持つことから単一の語を構成しているとみることができるが、前述した子音素の音声的実現のしかたからみると、語-後置詞間の境界は語間の境界と同種のものである。この点で動詞と共起する後置詞は動詞接尾辞と助詞の中間のステータスを持っている (Michailovsky 1981: 174)。

<sup>34</sup> 非動詞語根-接尾辞の境界も、非動詞語-後置詞の境界も、その前後に立つ子音素の組の実現の仕方は語間の境界と同じということである。

### 5.2.2. 境界の表示

次に、前節でみた自立度に基づく形態素の下位類の境界表示について観察する。

表 14は、拘束形態素とそのホストの間の境界が各文法書のグロス付き例文中でどのように表示されているかをまとめたものである。参照のため、語<sup>35</sup>の前後の境界も合わせて記した<sup>36</sup>。

表14 自立度による形態素下位類とその境界表示のしかた

	接辞	境界 接語	語	言語 [著者]
a.	—	=	スペース	Kurtöp [Hyslop], Bunan [Widmer], Atong [van Breugel], Karbi [Konnerth], Galo [Post], Kadu [Sangdong], Daai [Hartmann], Thadou [Haokip]
b.	—	= スペース	スペース	Yakha [Schackow]
c.	(境界なし)	—	スペース	Hayu [Michailovsky]
d.	—	スペース		Jinghpaw [Kurabe]
e.	—		スペース	Dhimal [King], Bantawa [Doornenbal]
f.	—		スペース	Darma [Willis], Zou [L. H. Singh], Khezha [Kapfo], Inpui [W. P. Devi], Lepcha [Plaisier]
g.	(境界なし)		スペース	Moyon [K. H. Devi]

接辞は伝統的に語内部の要素とみなされてきた単位であり、ホストとの境界は、語内の形態素の境界を表すのに通常用いられる - で表示される。また、語の前後の境界はどの文法書においてもスペースで表示されている。

表 14の a. は、自立度による形態素下位類それぞれの境界を 3 種類の表示によって区別する、最も自然かつ合理的なやり方と言える。接語とホストとの間の境界には = が用いられる。

b. の Yakha [Schackow] で接語の境界を = とスペースの 2 種類としたのは、Schackow が接語という術語に (i) 範疇的に制限されない接辞 *affixes that are categorically unrestricted* と (ii) 音韻的に拘束された語 *phonologically bound word*<sup>37</sup> の 2 つの読みを認めていることに関係している (Schackow 2015: 60 fn.16)。前者とホストの間の境界を = で表示し、後者は独立して生起可能でかつ句の主要部ともなり得る要素であることから、独立語と同様に前後の境界をスペースで表す。

c. の Hayu [Michailovsky] に関しては、補足が必要である。まず、形態論を扱う章で語根 + 接辞からなる単位の内部分析を行っているが、それを統語論を扱う章の例文に反映させていない。Hayu 語が極めて複雑な動詞形態論を持つため、例文の表記が煩雑になることを避けたためではないかと推察される。接辞の境界を表記しないのはこのような理由による。通常接辞の境界を表す - は、ここでは後置詞の境界を表す。例を挙げる。

<sup>35</sup> 接辞・接語との比較検討の対象となり得るのは、ほとんどの場合単純語である。

<sup>36</sup> 本稿で取り上げる文法書の中で略号・記号一覧に境界を挙げている文法書は意外に少なく、Jinghpaw [Kurabe], Atong [van Breugel], Lepcha [Plaisier], Galo [Post] のみである。

<sup>37</sup> Schackow は例として指示詞 *demonstrative* を挙げる (Schackow 2015: 60 fn.16)。この他に感嘆の助詞 *lai* もこれに該当する (ibid.: 522)。

- (13) kem-he      blɔ      nom  
 maison-dans tigre-∅ il-est

“Il y a un tigre dans la maison.” (Michailovsky 1981: 190, ex.(5.12-3))<sup>38</sup>

d. はそれ自体で文法語を成さないもの（接辞）と成すもの（接語・語）を異なる表記で表し分けたものである。ちなみに Jinghpaw [Kurabe] が接語と認定するのは、格標示の拘束形態素 (Kurabe 2016: 190) のみである。一方, e. は拘束形態素（接辞・接語）とそうでないもの（語）を異なる表記で表し分けたものである。

f., g. は接語という類を立てない文法書である。g. の Moyon [K. H. Devi] は c. 同様、語の内部構造を示していない。

### 5.2.3. 格を標示する形態素の自立度

最後に、形態素の機能類と、自立度による下位類との関係の一例として、格を標示する形態素のケースを取り上げる。本稿で取り上げる文法書の対象言語ではいずれも、格標示形式が格標示される要素に後続する。

表 15 は、本稿で取り上げる文法書が記述する有標の格標示形式の名称と、当該形式が接尾辞・後接語・独立語のどれに当たるかをまとめたものである。

表 15 の格名称の表記としては、完全名称に対応する Leipzig Glossing Rule 略号表上の略号を採用し、同略号表に載っていない名称については各文法書を参考に適宜表記を割り当てた。（表の下に LGR 非準拠の略号の一覧を示した。）このため、出典のグロス略号とは必ずしも合致していないことがある。（例：Atong [van Breugel] では comitative のグロス略号として &CO を用いるが、表では LGR 準拠の略号 COM に改めた。また、INST, INSTR を LGR 準拠の略号 INS に統一した。）類似の格概念に対して文法書間で異なる名称を用いている場合は、そのままにした。（例：comitative, associative, sociative）

接辞と接語を区別した上で格標示形式のあるものを接辞であるとする Thadou [Haokip], Bantawa [Doornenbal], Dhimal [King] の太字箇所は疑問の余地がある。

Thadou [Haokip] は ERG のみを後接語として扱い、他の格標示形式は接尾辞としている。確かに Haokip は ERG が名詞句の主名詞に後続する数詞に付加される例を挙げており (Haokip 2014: 126, ex.(79)), この例は ERG が名詞句レベルで付加される根拠とみなせる。

- (14) **tsápán t<sup>h</sup>ǔm-hò=in**    haĩ      á=nè=ùv=è  
**child**    **three-PL=ERG**    mango    3CLT=eat PL=DECL<sup>40</sup>  
 ‘The three children ate a mango.’ (Haokip 2014: 126, ex.(79))

しかし、Haokip は INST, LOC, COM についても同様の例を挙げており (ibid.: 126 (81), (82); 127 (85); 128 (91), (92)), ERG だけを別扱いする理由はない。少なくとも OBL 以外、おそらく全ての格標示

<sup>38</sup> 訳も語・後置詞に対するものとなっており、この点で厳密に言えば例文は「グロス付き」ではない。また、対訳行中のハイフンが語-後接語の境界表示の他、複数の語からなる訳語の区切りにも用いられており、用法に一貫性を欠く。

<sup>39</sup> Yakkha [Schackow] で Group II に属する case marker で、ホストに拘束されることも、強勢を伴って独立語として用いられることもある。また、標識としてだけでなく単独で副詞として用いられることもある。ここに挙げた以外に、direction/manner, temporal ablative の役割を表す形式がある。

<sup>40</sup> 正しくは 3CLT=eat=PL=DECL となるはずだが、原典通りにした。

表15 自立度の観点から見た各文法書の対象言語の格標示形式

言語 [著者]	総称	接尾辞	後接語	独立語
Kurtöp [Hyslop]	case marker		ERG, LOC, ABL, GEN	
Bunan [Widmer]	case marker		ERG, DAT, ALL, LOC, ABL, GEN, COM, <i>TERM, ADESS, INTESS</i>	
Jinghpaw [Kurabe]	case marking clitic		ACC, AGT, ALL, LOC, ABL, GEN, COM, <i>PER</i>	
Kadu [Sangdong]	nominal relational marker		TOP, A.AG, ALL, LOC, ABL, COM, <i>CMP, BEN, REASON</i>	
Atong [van Breugel]	case marker		ACC, INS, DAT, ALL, LOC, ABL, GEN, COM, <i>PER, SIM</i>	
Daai [Hartmann]	case marker		ERG, INS, DAT, LOC, VOC	
Hayu [Michailovsky]	postposition の一部		ERG, INS, LOC, ABL, GEN, <i>SOC, TERM, CMP</i>	
Galo [Post]	postposition		ACC, <i>NAGT</i> , DAT, LOC, ABL, GEN	
Thadou [Haokip]	case marker	<b>INS, OBL, LOC, COM</b>	ERG	
Bantawa [Doornenbal]	case suffix	<b>ERG, DAT, ALL, LOC, ABL, GEN, COM, VIA, CMP, VOC</b>		
Karbi [Konnerth]	role marker		COM, INS, ABL	<i>NSUBJ, LOC</i>
Yakkha [Schackow]	case marker		ERG, INS, LOC, ABL, GEN, COM	<i>CMP, BEN, SIM etc.</i> <sup>39</sup>
Dhimal [King]	case marker	<b>INS, DAT, LOC, EL, GEN, CIRC</b>		ALL, COM
Darma [Willis]	role marker			ERG, INS, DAT, LOC, ABL, POSS, COM, BEN, <i>MAL, EQU</i>
Moyon [K. H. Devi]	noun inflectional suffix の一部	ACC, NOM, INS, LOC, ABL, GEN, <i>ASSOC</i>		
Zou [L. H. Singh]	case suffix	ACC, <i>AGT</i> , INS, DAT, LOC, ABL, GEN, COM		
Khezha [Kapfo]	case marker	ACC, NOM, INS, LOC, ABL, <i>SOC, BEN</i>		
Inpui [W. P. Devi]	case marker	ACC, NOM, INS, DAT, LOC, ABL, GEN, <i>ASSOC</i>		
Lepcha [Plaisier]	case ending	DAT, LOC, ABL, GEN, COM, <i>LAT</i>		

#AntiAgent, ADESSive, AGenTive, ASSOCIative, CIRCumlocative, CoMParative, ELative, EQUative, INTereSSive, LATive, MALefactive, MOBilitative, Non-AGenTive, Non-SUBject, PERlative, SIMilative, SOCiative, TERMinative, VIAlative

形式が後接語であろうと推測される。もし接尾辞であるのなら、これらの格標示形式が主名詞に付加されないのはおかしい。

Dhimal [King] では、格標識のうち2つが語ではなく句のレベルで機能し、ゆえに接語の性質を示すと述べているが (King 2014: 74), 残念なことにはどの格標識が接語であるかを明記しておらず、接辞・接語の境界表示にいずれも - を用いているために表記から判断することもできない。King は名詞句構造の概観も与えていないため推測するしかないが、主名詞が量化子・限定用法の形容詞・属格句・限定用法の指示代名詞のいずれかを伴った単位が明らかに名詞句をなすと考えるなら、INST (§3.5.3), DAT (§3.5.6), LOC (§3.5.2), CIRC (§3.5.5) の各節に、当該格標識が名詞句の主名詞に付加される例が見られるので、この4つとも接語の資格を持つことになる。残る GEN と EL の格標識だけが接辞であるとは考えにくく、おそらく COM と ALL を除く全ての格標識は接語であろうと推測できる。

Bantawa [Doornenbal] は等位接続された2つの名詞のうち後の名詞に LOC が付く例を挙げている (Doornenbal 2009: 80 (130b))<sup>41</sup>。このことから、少なくとも Bantawa 語の格標識 LOC は名詞句レベルで付加された要素、すなわち接語である。こちらも、接辞と認定した全ての格標示形式が実際は後接語である可能性が高い。接尾辞だとしたら、等位接続された名詞の両方に格標識が現れなければならないはずである。

ちなみに、接語という下位類を立てず、格標示形式を接尾辞とみなす文法書のうち、Moyon [K. H. Devi] と Khezha [Kapfo] には主名詞に後続する量化要素に格標示形式が付加される例が (K. H. Devi 1989: 121 ex.d.; Kapfo 1992: 171 ex.27), Zou [L. H. Singh] と Lepcha [Plaisier] には等位接続名詞句の後名詞に格標示形式が付加される例が (L. H. Singh 2013: 189 ex.(115a); Plaisier 2006: 146), それぞれ挙がっている。

筆者の推測が正しいとすると、本稿で取り上げる文法書の対象言語に見られる格標示形式の自立度からみた分布は表 16 のようになる。太字の文法書は、表 15 から扱いが変更されたものである。

表16 自立度の観点から見た各文法書の対象言語の格標示形式 (修正版)

	言語 [著者]	接尾辞	後接語	独立語
a.	Kurtöp [Hyslop], Bunan [Widmer], Jinghpaw [Kurabe], Kadu [Sangdong], Atong [van Breugel], Daai [Hartmann], Hayu [Michailovsky], Galo [Post], <b>Thadou [Haokip], Bantawa [Doornenbal]</b>		○	
b.	Karbi [Konnerth], Yakkha [Schackow], <b>Dhimal [King]</b>		○	○
c.	Darma [Willis]			○
d.	Moyon [K. H. Devi], Zou [L. H. Singh], Khezha [Kapfo], Inpui [W. P. Devi], Lepcha [Plaisier]	○		

<sup>41</sup> 厳密にいうと、この例の等位接続名詞句 *buktaj k'onki sijraj-b'en-da* (cave and tree-foot-LOC) 'in caves and at the foot of trees' において、*buktaj* (cave) と *sijraj-b'en* (tree-foot) を接続する要素 *k'onki* は時間的順序付けを表す接続詞なのだが、そうであったとしても LOC の作用域に *buktaj* が含まれることには変わりがない。

接辞と接語を区別する a. と b. では、格標示形式は接語あるいは独立語に分類される。接語を立てない c. と d. では、格標示形式は Darma [Willis] を除いて接辞に分類されているが、ここでの「接辞」はいわば拘束形態素の総称であり、等位接続名詞句や、主名詞が末位に立たない名詞句における振る舞いを見る限り、格標示形式が名詞句全体を作用域とするのは確かであろう。

格標示形式が接語と独立語に分類される b. のケースでは、項の格標示を行う形式は接語であり、独立語はどちらかというとき周遍的な格を標示することが多い。Yakha [Schackow] はその典型的な例である。これに対して、反例と言えるのが Karbi [Konnerth] で、2 項動詞の P 項・3 項動詞の T 項および人間的 R 項<sup>42</sup>を標示するのに用いられる標識 *-phān* ‘non-subject’<sup>43</sup> および 3 項動詞の場所的 R 項を標示するのに用いられる標識 *-lòng* ‘locative’<sup>44</sup> が共に関係子名詞 relator noun<sup>45</sup> に分類され、一方、どちらかといえば周遍的な格とみなされる共格 comitative/具格 instrumental/起格 ablative を標示する形式 *=pen* が接語に分類される、という「逆転」が起こっている。

- (15) lasi        [lasó arni=**pen=ke**]<sub>1</sub> [hála hī'ipī aphān=**ke**]<sub>2</sub> pe-avē-dèt-lò        ...  
 therefore **this day=from=TOP** **that witch NSUBJ=TOP** CAUS-not.exist-PFV-RL  
 (#ReaLis)  
 ‘from that very day on, he killed the witch, ...’ (Konnerth 2014: 497, ex.(733) 最初の節のみ<sup>46</sup>)

## 6. おわりに

本稿のもととなった発表を行った研究プロジェクトのテーマである「参照文法書（の）研究」に沿ったトピックとして、本稿では記述文法を扱った博士論文 19 本を取り上げ、記述上重要な概念や言語現象のいくつかについて比較検討を行った。この作業を通して浮かび上がるのは、「概念規定」と「明示性」という、なにを今更と言われても不思議でない 2 つのキーワードである。ただ、全ての記述文法がこの要件を十全に満たしているわけでもなさそうである。

§5.1 で扱った語類は、文法現象を記述するに当たっての根幹の一部をなす分類概念である。記述者は対象言語の語類にどのようなものを立てたのかを明確にする必要があるし、また、ある形式類を語類とみなすのか、あるいは語類の下位類とみなすのか、という点についても同様のことが言える。これらが明示的に示され、容易に一覧できるようにしてあった方が、参照者としてはありがたい。ただ、単に明示的であればいいというものでは勿論なく、前提として、語類そのものが対象言語の言語事実即して、明確な基準に基づいて規定されている必要がある。

§5.2 で扱った接語は、種々雑多な要素を含む非均質な類であることが知られている。また、対象言語の音韻語・文法語との兼ね合いを考慮して定義を与えられるべき単位である。記述者自身がどういう定義に従っているかを明らかにした上で用いるべき概念であることは疑いない。接語の定義そのもの、あるいはその出所を明らかにせず、記述者が常識と思っているものに委ねてし

<sup>42</sup> Karbi [Konnerth] の記述によると、3 項動詞の項のうち最も動作主らしいものを A 項、受領者・位置・着点らしいものを R 項、転移物として最も容易に概念化されるものを T 項と規定している (Konnerth 2014: 438)。

<sup>43</sup> Karbi [Konnerth] では接頭辞を伴わない形でこの形態素に言及しているが、用例をみると、所有接頭辞を伴った *a-phān* (POSS-NSUBJ) などの形式か、指示詞と複合した形式で用いられている (ibid.: 480-485)。

<sup>44</sup> こちらも Karbi [Konnerth] の用例では、所有接頭辞を伴った *alòng* という形式で用いられている (ibid.: 486-489)。

<sup>45</sup> 注22を参照。

<sup>46</sup> 原典では例文の 1 行目に形態素分析しない表示が挙がっているが、本稿の引用では省略した。また、[] で括られた 2 つの名詞句がさらに枠線で囲われているが、それも省略した。

まうと、その「常識」が言語普遍的なものとも、広く読者に了解されているとも限らないため、議論が破綻をきたすおそれがある。

接語と接辞の区別を立てたのであれば、互いに異なる境界表示によって両者を区別するのが、明示性の観点からみて当然の対応である。そうしない場合、あるいは両者を判別しがたいという意識が働いているのかもしれない。考えられる理由として、当該の拘束形態素が語を作用域とするのか、あるいは句を作用域とするのかが判然としないケースが存在する状況を想定することができる<sup>47</sup>。一方、接語と独立語の境界に同じ表示を用い、接辞の境界と区別する動機としては、独立語であるが接語化することもある形式の存在が考えられる<sup>48</sup>。いずれにせよ、境界表示のしかたが、類そのものや分類の仕方に対するながしかの情報を含んでいる可能性もありそうである。

ついでながら、格を標示する拘束形態素が名詞句を作用域とするかどうかを判断するためには、名詞句の構造が規定され明示されている必要があるのだが、文法書の全てが名詞句構造を文章や図示で示しているわけではない。この点についても、一般化された名詞句構造についての言明、願わくば図示が望ましい。同じことは動詞述語構造などについても当てはまる。

限られたデータから1つの言語の包括的な全体像を記述するのみならず、「概念規定」と「明示性」への配慮を行きわたらせるのは、困難を伴う作業である。しかし、それをクリアした文法書が、よりレベルの高い「参照文法書」足り得るのではないかと考える。

## 謝辞

本研究はアジア・アフリカ言語文化研究所の共同利用・共同研究課題「参照文法書研究」（2016–2017年度）の成果の一部である。

## 参考文献

< 本稿で比較検討の対象とした記述文法 >

[DL] はダウンロード可能なもの。

van Breugel, Seino. 2008. "A grammar of Atong." Ph.D. thesis, Bundoora: LaTrobe University. 760pp. [DL]

Devi, Kongkham Hemabati. 1989. "A Descriptive Study of the Moyon Language." Ph.D. thesis, Canchipur: Manipur University. 406pp. [DL]

Devi, Waikhom Pinky. 2014. "A Descriptive Grammar of Inpui." Ph.D. thesis, Silchar: Assam University. 236pp. [DL]

Doornenbal, Marius Albert. 2009. "A Grammar of Bantawa: Grammar, Paradigm Tables, Glossary and Texts of a Rai Language of Eastern Nepal." Doctoral thesis, Leiden University. 513pp. [DL]

Haokip, Marykim. 2014. "Grammar of Thadou-Kuki: A Descriptive Study." Ph.D. thesis, New Delhi: Jawaharlal Nehru University. [DL]

<sup>47</sup> §5.2.3では、拘束形態素である格標示がおおむね名詞句を作用域とする接語であろうと推測した。名詞句の主名詞に後続する修飾要素や量化要素などの要素や、等位接続名詞句の末尾の名詞に格標示が付加されているのであれば、名詞句を作用域とする根拠が形式的に与えられるとみなせる。しかし、もしもそのような構造が当該言語で利用可能でなければ、根拠を意味解釈のみに求めることを余儀なくされるであろう。

<sup>48</sup> 本稿 p.20 の Bunan [Widmer], Yakkha [Schackow] の事例を参照。表 14 b. でみたように、Yakkha [Schackow] は音韻的に拘束された語（拘束形式となることもある）を独立語と同様にスペースで区切り、範疇的に制限されない接辞（常に拘束形式で、=によって境界表示される）から区別する。

- Hyslop, Gwendolyn. 2011. "A Grammar of Kurtöp." Ph.D. dissertation, Eugene: University of Oregon. xxxix+729pp. [DL]
- Kapfo, Kedusto. 1992. "Khezha: A Descriptive Analysis." Ph.D. dissertation, University of Mysore. xiv+372+vi pp. [DL]
- King, John Timothy. 2008. "A Grammar of Dhimal." Doctoral thesis, Leiden University. 667pp. [DL]
- Konnerth, Linda. 2014. "A Grammar of Karbi." Ph.D. dissertation, Eugene: University of Oregon. 793pp. [DL]
- Kurabe, Keita. 2016. "A Grammar of Jinghpaw, from Northern Burma." Doctoral dissertation, Kyoto University. xi+688pp.
- Michailovsky, Boyd. 1981. "Grammaire de la langue hayu (Nepal)." Ph.D. dissertation, University of California, Berkeley. 324pp. [DL]
- Plaisier, Heleen. 2006. "A Grammar of Lepcha." Doctoral thesis, Leiden University. 226pp. [DL]
- Post, Mark W. 2007. "A Grammar of Galo." Ph.D. thesis, Bundoora: LaTrobe University. 947pp. [DL]
- Sangdong, David. 2012. "A Grammar of the Kadu (Asak) Language." Ph.D. thesis, Bundoora: LaTrobe University. 706pp. [DL]
- Schackow, Diana. 2015. *A Grammar of Yakkha*. (Studies in Diversity Linguistics 7.) Berlin: Language Science Press. 578pp. [DL]
- Singh, Lukram Himmat. 2013. "A Descriptive Grammar of Zou." Ph.D. thesis, Canchipur: Manipur University. ix+248+iii pp. [DL]
- So-Hartmann, Helga. 2009. *A Descriptive Grammar of Daai Chin*. (STEDT Monograph Series 7.) Berkeley: Center for Southeast Asia Studies. 392pp. [DL]
- Widmer, Manuel. 2014. "A Descriptive Grammar of Bunan." Ph.D. dissertation, Universität Bern. 910pp. [DL]
- Willis, Christina M. 2007. "A Descriptive Grammar of Darma: An Endangered Tibeto-Burman Language." Ph.D. dissertation, University of Texas at Austin. 629pp. [DL]

## その他

- Aikhenvald, Alexandra Y. 2002. "Typological Parameters for the Study of Clitics, with Special Reference to Tariana." Dixon, R. M. W. and Alexandra Y. Aikhenvald, eds. *Word: A Cross-Linguistic Typology*, 42–78, Cambridge University Press.
- Delancey, Scott. 2003. "Classical Tibetan." Thurgood, Graham and Randy LaPolla, eds. *The Sino-Tibetan Languages*, 255–269, London: Routledge.
- Matisoff, James A. 2003. *Handbook of Proto-Tibeto-Burman, System and Philosophy of Sino-Tibetan Reconstruction*. (University of California Publications in Linguistics, No. 135.) Berkeley, Los Angeles, London: University of California Press.
- Sastry, G. Devi Prasada. 1984. *Mishmi Grammar*. (CIIL Grammar Series 11.) Mysore: Central Institute of Indian Languages. xi+132pp.
- VanBik, Kenneth. 2009. "Proto Kuki-Chin: A Reconstructed Ancestor of the Kuki-Chin Languages." (STEDT Monograph Series 8.) University of California, Berkeley.

林範彦 2022 「中国および周辺領域のチベット・ビルマ諸語の参照文法書と諸問題」 渡辺己・澤田英夫(編)『参照文法書研究』(アジア・アフリカ言語文化研究 別冊 02), 107–120, 府中: 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

Department of Linguistics, Max Planck Institute for Evolutionary Anthropology. "The Leipzig Glossing Rules: Conventions for Interlinear Morpheme-by-Morpheme Glosses." (Last Change: May 31, 2015.)

Hammarström, Harald, Robert Forkel, Martin Haspelmath, and Sebastian Bank, eds. 2021. *Glottolog 4.4*. Leipzig: Max Planck Institute for Evolutionary Anthropology. <https://doi.org/10.5281/zenodo.4761960> (Available online at <http://glottolog.org>, Accessed on 2021-09-10.)